

1. 私たちの聞いたことを、だれが信じたか。  
主の御腕は、だれに現われたのか。
2. 彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のように育った。  
彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。
3. 彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。  
人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。
4. まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。  
だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。
5. しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。  
彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、  
彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。
6. 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。  
しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

「苦難のしもべ」の話は 52 章から始まる。

13. 見よ。わたしのしもべは栄える。  
彼は高められ、上げられ、非常に高くなる。
14. 多くの者があなたを見て驚いたように、  
・・・その顔だちは、そこなわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違っていた。・・・
15. そのように、彼は多くの国々を驚かす。  
王たちは彼の前で口をつぐむ。  
彼らは、まだ告げられなかったことを見、まだ聞いたこともないことを悟るからだ。

イスラエルのことを言っているのか？ ~ しかし、(14) イスラエルと主のしもべでは苦しみの原因と程度がまるで違う。

「そのように、彼は多くの国々を驚かす。」 = ここだけ ~ 「驚いた」(14) 「口をつぐむ」(15) の前後からの解釈  
本来は「振りかける」 ~ いけにえの動物の血を振りかけることに (レビ 16:14,15,19)  
故にここでは「主のしもべが国々から罪を清めるために血を注ぐ」と教えている。  
この世の権力者、王たちも、  
このような恐るべき苦難によって血を注ぐことで罪の贖いをするという  
前代未聞の働きをした主のしもべの前に、畏敬の故に「口をつぐむ」しかない。

1. 私たちの聞いたことを、だれが信じたか。  
主の御腕は、だれに現われたのか。

Witə'mwli !ymiah, ymi

!ma' Hiph. 1. stand firm : しっかり立つ. 2. trust, believe:

`htl'gal ymi l [; hwby > [ArzW

hl G uncover, remove (Qal 1. !zohl G uncover, the ear of one, i.e. reveal to him; 1. ywG disclosed, published. 2., intr. remove, depart. 3. go into exile.)

Niph. 1. refl. a. uncover oneself, (one's nakedness). b. discover or shew oneself, la, c. reveal himself, (of God), la,

2. pass. a. be uncovered (one's nakedness). b. be disclosed, discovered, foundations; gates of death. c. be revealed, with, l, the things revealed.

3. be removed. [Arz] n.f. and (rare) m. arm, shoulder, strength (In , abs. and cstr. sg. more oft. plene, in pl. and c. sf. more

oft. defect. In one , instance where Z is masculine it means a political or military force) -- ,

1. arm, a. lit., of a man; in fig. of Y teaching Ephr. to walk. b. arm as , seat of (human) strength. Esp.

c. Yahweh's arm as instrument of , deliverance and judgment. Hence,

2. arm, as symbol of strength: a. , human. b. = divine strength.

3. Pl. forces, political and military. 4. Shoulder of animal sacrificed, belonging to priest. (pg 283)

### Who has believed our message

### and to whom has the arm of the LORD been revealed?

「私たち」：イザヤ自身を含めたイスラエルの民を意識したもの。

「主のしもべが、国々から罪を清めるために血を注ぐ」という

恐るべき苦難によって人々と救うという前代未聞の話の一体「誰が信じていることができたか」。

それは、「主の御腕」が発揮されるのでなければ、この驚くべき知らせを到底信じていることが出来ない。

この前代未聞の救いの知らせは、同じく前代未聞の特別な方法で知らされることになる。

### 2 . 彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のように育った。

h'ci #ramevr, Vkw wml. qnAK; l [Yw

land of drought

root

qny : young plant, sapling (sucker) in sim. of the suffering servant of 'Y. 「乳飲み子」

=desert

hl' ['Qal Impf. go up, ascend, climb

from lo w place to high, of animals, go or come up

of vegetation, spring up, grow, shoot forth: trees; grass;

「苦難のしもべ」は「主の前に若枝のように芽生え」育つ(2) = 一生を主に守られ、主に従って過ごす  
しかし、その環境は、水のない「砂漠の地から出る根のよう」であった。

イエスキリストが生まれ育った環境も、あらゆる意味で「砂漠の地」のようであった。

国際的環境：イスラエルはローマ帝国の植民地として、傀儡政権のエドム人ヘロデが支配する。

国民の宗教的環境：サドカイ人、パリサイ人といった神に逆らう宗教指導者たちに真理の光が抹殺される

イエスご自身の個人的環境：王家の子孫が、没落に没落を重ねて日銭を稼いで生活する大工・石工に。

つまり、せつかく「この方こそ自分の民をその罪から救って下さるお方」として生まれ育ったのに、

しかし、「砂漠の地」から生まれ育って、「見とれるような姿も、輝きも、私たちが慕う見ばえ」もない。

彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。

Widexnw harm, al {Warnd rdh' al { Al rat' al {

n.m.

har'

ornament, splendour, honour

rat'

outline, form -- form, of woman; of cattle; tree.

sight, appearance

Qal Impf. 1.pl.

1. ornament. 2. splendour, majesty

ラケルは「姿も顔立ちも美しかった」「姿の美しい女性」

dmx'

3. honour, glory.

牛の「肉づきが良い」「ヨセフは体格も良く」

**Qal 1.pl. desire, take pleasure in --**

**a.** in bad sense of inordinate, ungoverned, selfish desire, sq. acc.; of lustful desire.

**b.** = *take pleasure in*, of idolatrous tendency.

**c.** less often in good sense, said of God; obj. the suffering servant of Y, no beauty in him,

*that we, should desire him* (choose him, be drawn toward him);pt. pass. coll. **AdWrxu** *his desired* things, i.e. chosen, choice, desirable

He grew up before him like a tender shoot,  
and like a root out of dry ground.

He had no beauty or majesty to attract us to him,  
nothing in his appearance that we should desire him.

「見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない」生涯 = キリストの、死を頂点とする生涯

3 . 彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。

人が顔をそむけるほどさげすまれ、

私たちも彼を尊ばなかった。

yl ko [Myt Abakm vyai ~vyjai l dxw hzn]

**Qal.pass.** b'akm

**n.m. pain**

肉体的、精神的な痛み、悲しみ

l dx' hzb' **Niph. Pt.** *despise, regard with contempt*

**1. despised. 2. vile, worthless. 3. despicable, contemptible**

軽蔑された 恥ずべき

卑しむべき、見下げ果てた、卑劣な。

**l dx' vb. Qal. cease** 終わる、やめる、離れる、休む、差し控える、我慢する

**2. of mental pain** (of troubles of wicked), of Babylon;

(as result of sin; of Y's servant); in Ys , word to Baruch; partic. of suffering servant of Y.

yl k **n.m. sickness** -- *sickness, disease*; of the suffering servant of Y; of rich man;

*incurable disease; recover from sickness*; metaph. of , distress of land; = *wound*, of violence in Jerusalem. (pg 318)

キリストが病身であったというのではなく、 罪の罰を痛みとして表現している。

肉体の病や痛みを癒す働きの中で、主がそれを負い、受けた。

主がこれほど我々のために苦しまれたにもかかわらず、

しかし、我々はその主の苦しみを意味を理解しないで、顔を背けるほどさげすんだ

hznl Wmi ~ynP' rTsmk

hzb' **Niph. Pt.**

rTsmi n.[m.] **secret place, hiding-place --**

*despise, regard with contempt* **1. secret place(s)**, concealed from view; where treasures are stored.

(as a lion)

**2. hiding - place(s): a.** for protection. **b.** for perpetration of crime, esp. murder: sim. of lion; of Y lying in wait

Wnbvx] al [w

bvx' **Qal. pf. think, account -- Qal**

**I. of man:**

**1. think**; sq. 2 acc.; elsewhere c. acc. + l; so, fig., of crocodile *he reckoneth iron as straw* .

2. *devise, plan, mean*, c. acc.; c. inf.: c.  $\text{ytlbl}$  + Impf.

3. *count, reckon*.

4. *esteem, value, regard*, silver, a man, the servant of  $\text{y}$ .

5. *invent*, ingenious and artistic things;  $\text{bv\text{v}ohf\text{h}}$  *work of the cunning* (ingenious, inventive) *workman*;  $\text{bv\text{v}x}$   $\text{tbyx\text{h}}$   
*inventions of inventive, men* (of engines of war);  $\text{bv\text{v}vr\text{x}'}$  *craftsman and inventive workman*.

**II. of God:**

1. *think*, c. acc. pers +  $\text{l}$ . indirect obj. *account one*,  $\text{bywal}$ , *for an enemy*.

2. *devise, plan, mean*, c. acc. +  $\text{l}$  indirect obj.  $\text{hbjl}$  *for good*; c.  $\text{l}$  pers.  $\text{yli}$  *devise for me*; acc. rei +  $\text{l}$  [ $\text{;}$ ]; *devise*,  
*something against a person; towards one*, c.  $\text{la}$  *against*; sq. inf.

3. *count, reckon*, c. acc. rei +  $\text{l}$  pers., the habit of believing in  $\text{y}$  *he*,  
*reckoned to Abram as righteousness* (cf. **Niph. 3**); not *reckon iniquity to one*.

He was despised and rejected by men, a man of sorrows, and familiar with suffering.  
Like one from whom men hide their faces he was despised,  
and we esteemed him not.

4 . まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。

$\sim\text{l}$   $\text{bs'}$   $\text{WbyakmW}$   $\text{afn'}$   $\text{aWh}$   $\text{WyE'xY}$   $\text{!ka'}$  surely, indeed

$\text{l}$   $\text{bs'}$  (肉体精神的な) 痛み、悲しみ  $\text{afn'}$   $\text{yl}$   $\text{kY}$  **n.m. sickness** -- *sickness, disease*; of the suffering servant of  $\text{y}$ ; of rich man;

**Qal. Pf.** bear a heavy load

**Qal. Pf.** incurable disease; recover from sickness; metaph. ,

**lift, carry, take** of distress of land; = *wound*, of violence in Jerusalem. (pg 318)

Surely he took up our infirmities and carried our sorrows,

だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

$\text{hN\text{h}mW}$   $\sim\text{yhl}$   $\text{h/}$   $\text{hKeu}$   $[\text{y}\text{h}^{\text{h}}$   $\text{W}\text{h}\text{b}\text{v}\text{x}]$   $\text{W}\text{kr}\text{aj}\text{w}$

$\text{hn}[\text{'}$   $\text{hkn'}$   $[\text{g}^{\text{h}}$   $\text{bv}\text{x}'$  私たち

**Pu.** **Hoph.** **Qal.Pass.Pt.** **Qal.Pf.** think, account

1. *be afflicted*, in discipline by God. **touch, reach, strike** **1.** = *receive a blow* (Judah, under fig. of man).

2. *be humbled* by fasting. **2. be wounded. 3. be beaten. 4. be** (fatally) *smitten* + vb. of dying; *be killed, slain* (c.  $\text{l}$  [ $\text{;}$ ]; *for*).  
**5. be attacked and captured**, , of city.

**6. be smitten** with disease (by God); abs., of  $\text{y}$ 's servant.

**7. be blighted**, of plant (in fig.) (Ephr.), (heart,  $\text{bf}$ ,  $[\text{K}^{\text{h}}$  both +  $\text{vby}^{\text{h}}$ ). (pg 645)

yet we considered him stricken by God, smitten by him, and afflicted.



## 説教

イザヤはおよそ紀元前八世紀に活躍した預言者でした。

イザヤ書 53 章は、彼の時代から数えて

およそ 700 年後（今から約二千年前）に到来することになる人類の救い主イエスキリストの到来を予告したものです。

ちなみに、

「紀元前」のことを「BC」、「紀元後」のことを「AD」と呼びますが、

「BC」は「Before Christ（英語で『キリスト以前』の意味）」、

「AD」は「Anno Domini（ラテン語で『主の年に』の意味）」の略語です。

だから、今年は西暦 AD2006 年ですから、キリストがこの世にお生まれになってから 2006 年目ということになります。

人類の救い主キリストの到来によって新たな時代が始まったことを昔の人はこう表現したのです。

でも、今日のイザヤは、その二千年前のキリスト来臨を、それをさらにさかのぼること約 700 年前に予言していたのです。

イザヤはここでまず次のように語りかけます。

### 1. 私たちの聞いたことを、だれが信じたか。

#### 主の御腕は、だれに現われたのか。

「主の御腕」は「主の手、肩、力」です。

その「主の力」が誰にあらわされたのかということですから、

要するに、

これからイザヤが話そうとすること、

救い主イエスキリストのこと、

救い主イエスキリストがどのようにして私たち罪人を救おうとなさったのか、

そのいわゆる「福音」というものは、

一体誰が信じる事が出来るというのか、

誰も信じる事ができない、

余程のことがなければ、

人間の力ではありえない、

主の力が特別にその人に現れることがなければ、到底それを信じることはあり得ない、絶対にあり得ない、というのです。

みなさん、私たちがイエスさまを信じることはこの世で最も難しいことです。

なぜなら、これは人間の知性の限界をはるかに超えているからです。

人間が努力して到達できるものではありません。

死ぬほど努力しても到達することはできません。

どんなに勉強をしても、どんなに研究を重ねても、どんなに善行を働いても、それでキリストを信じることはできないのです。

使徒パウロは、キリストの十字架の福音は「ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚か」と言いました。

ユダヤ人にとっては「つまずき」だし、異邦人にとっては「愚か」だと言うのです。

ということは、要するに誰も信じられないというのです。

人間の力では、誰も信じられないのです。  
神の力がなければ、神の助けがなければ、  
特別にその人に「主の御腕」があらわれることがなければ、その人は一生涯そして永遠にキリストを信じることができません。  
ですから、すでにイエスさまを信じておられるみなさんは幸いです。  
この世で最も幸いな人たちです。  
みなさんは神さまに選ばれた人たちです。  
そして、今日この時、ここに集ってこうして「福音」を聞いているみなさんも幸いです。  
神さまがその「御腕」を顕して、特別に働いてくださって、  
ここに集うみなさん一人一人が、今日聞く話をよく悟ることができるよう心から祈ります。

それでは、私たちが救ってくださる人類の救い主を、イザヤはどのように描写しているのでしょうか。

## 2. 彼は主の前に若枝のように芽生え、砂漠の地から出る根のように育った。

**彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。**

イザヤは救い主を砂漠の地で力強く成長していく「若枝」に喩えます。  
何も育つはずのない、水のない、カラカラの、死の世界である砂漠で、  
それでも、そういう中でも、「主の前に」力強く成長していく「若枝」としてキリストを表現するのです。

どうして「砂漠」なのでしょう？

どうして「砂漠」で育たなければならないのでしょうか？

それしかないからです。

この「砂漠」というのは、この世の、この世界の、何をやってもうまくいかない不毛の現実を表現しています。

聖書で言う「砂漠」とか「荒野」とは、

最初人間アダムが水の豊かなエデンから追放されて追いやられた不毛の地を意味します。

そこでは悪魔が支配しています。

人間を惑わしています。

人間を惑わして、罪を犯させます。

そして、神の怒りと呪いを受けて、滅びるのです。

神に呪われた現実、それが「砂漠」です。

人は、すべて無に帰し最後は空しく死に至る

「この世」という巨大な「荒野」「砂漠」に於いて、

やってもやっても実を結ばない空しい労働をひたすら繰り返しながら、

悪魔に惑わされて神の前に罪を犯し、そうして神の怒りを受けて滅びるのです。

みんな滅びて滅び果てた残骸の集まりが「砂漠」です。

そして、そこでは、惑わされて、罪を犯して、神の怒りを受けて滅びた人間たちを見下しながら悪魔が高笑いしています、

それが「砂漠」です。

そして、この死の世界である「砂漠」に、イエスキリストはお生まれになります。

そして、「若枝」のように成長していきます。

何のためでしょうか？

「砂漠」を変えて、「果樹園」となすためです。（イザヤ 35 章）

「砂漠」に水を湧き出させ、

呪われた「砂漠」を変えて「果樹園」となすべく、イエスキリストは世に来られるとイザヤは預言するのです。

それでは、一体それはどのようにして実現されるのでしょうか。

不毛の地に力強く伸び続ける「若枝」なるキリストは、

どのようにして死んだ世界にいのちの水を湧き出させるのでしょうか。

それを考える前に、

その救い主とはどのようなお方なのでしょうか。

イザヤは詳細にその姿を記録します。

彼はまだ見ぬ救い主をいかにも見たかのように描写しています。

新約聖書には、イエスさまの風貌や雰囲気、姿形に関する記録がありません。

「あなたはまだ五十にもならないのに」という記録、つまりまだ五十才には見えない風貌という以外の記録はありません。

ですから、このイザヤの記録はイエスさまがどういう姿をしておられたかを知る上でとても重要な資料になると思います。

それを見ますと、意外にもイザヤは次のように救い主を描写します。

**2. 後半 彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。**

「見とれるような姿」（体格の良さ、肉づきの良さ、美しい顔立ち）もない、

「輝き」（光輝、華麗さ、堂々とした威厳、栄誉、栄光）もない、

そして、「私たちが慕うような見ばえ」（自分がそうなりたいと節に願うような外見）もないと言うのです。

つまり、イザヤが描く救い主の姿はそういうものがまるでないのです。

「体格の良さ、美しい顔立ち」とか、

「華麗さ、堂々とした威厳」とか、

「自分がそうなりたいと節に憧れるような外見」をまるで持ち合わせていないのです。

あえて言うと、

体格は良くないし、

顔も見栄えもしない、

堂々たる威厳もなく、

間違ってもそのようになりたいとは全然思わない、そういう人だと言うのです。

いや、それどころか、次の節を見ると、そうなりたいと思わないどころか、

もっとはっきり言って、絶対にそうはなりたくない人物として、イザヤはこう描写します。

**3. 彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。**

**人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちが彼を尊ばなかった。**

「さげすまれる」は「見下される、軽蔑される、恥と見なされる」の意味です。

「のけ者にされ」とは「その人から避けて行く、離れて行く」（差別される、いじめられる）という意味です。



「悲しみの人」は「痛みの人、悲しみの人」の意味で、  
「病を知る」とは文字通りの意味では「病気の人」のことです。

つまり、救い主は、  
風貌が良くないだけでなく、  
人々から「見下され、軽蔑され、恥と見なされ」、  
「痛みの人、悲しみの人」で、  
あわれな「病気持ちの人」であり、  
しかも、  
どれほど人から軽蔑されるかと言えば、  
「人々からのけ者にされ、人々が離れて行き」、  
さらにはあんな奴は忌まわしくて顔も見たくないと  
「彼から顔を背けるほど」、とにかく「徹底的に忌み嫌われる」と言うのです。

そして、3節の最後にイザヤはこう付け加えます。

**私たちも彼を尊ばなかった。**

つまり、本当に誰も彼を見て救い主だとは思わないというのです。  
イザヤ自身も、そしてイザヤの回りにいる人々も、まさかこの人が救い主イエスキリストとは夢にも思わなかった、  
誰がどう見ても、否、自分がこの目で目を凝らしてよくよく見ても、到底この人が救い主だとは見えないというのです。

わかりますね。

つまり、到底、救い主だとは見えないほど冴えない人物がイエスキリストだというのです。

これはとても意外です。

私たちは、  
人類の救い主と聞くと、  
ついイケメンで、体格も立派で、堂々たる威厳に満ち、栄光に輝いて、  
この地上のあらゆる民族、あらゆる国々の人々から慕われ、尊敬され、  
みんなの憧れの的のような、まるで宮殿の王子様みたいに絵に描いたようなヒーローを思い描きます。

しかし、預言者イザヤが私たちに伝えてくれる救い主の姿はそれと全く正反対です。

風貌はさえない、  
不格好で、  
病気持ちで、  
人々から人気が無いどころか、  
人から忌み嫌われ、  
徹底的にのけ者にされて、  
いつも心に痛みがあり、  
悲しんでいる、と言うのです。

そして、誰も彼を救い主とは思わない、  
これが救い主です。  
イザヤが私たちに今も伝える人類の救い主の姿です。  
救い主イエスキリストの生涯を一言で言い表すならば、  
それは、  
「惨めな」、  
驚くほど「惨めな」、  
あらゆる意味で「惨めな」、  
みすばらしい、  
哀れで、  
風貌も、尊厳も、栄光も、健康も何もない、  
それは全く話にならないほど「惨めな」、「呪われた」生涯です。

いったいどうして、と私たちは思います。  
救い主ともあろうお方がいったいどうしてこんなに惨めなのか、と私たちは思います。  
これが、アブラハムやダビデといった旧約の聖徒たちが待ち望んできた救い主の姿なのでしょうか。  
こんな惨めな人間を何千年もの間待ち続けてきたのでしょうか。  
こんな哀れで今にも死にそうな救い主が、私たちを救ってくれるのでしょうか。  
神に呪われた、このように惨めな救い主が、一体どうやって私たち人類を救ってくれるのでしょうか。  
どこにその力があるのでしょうか。  
どこに私たち罪人を救う力があるのでしょうか。  
あまりに罪深くて地獄に墮ちる以外にない私たちを地獄から救い出す力は、どこにあるのでしょうか。

それは、あります。  
この一点にあります。  
すなわち、  
キリストがこの世で最も惨めな呪われた生涯を生きられたのは、他でもない**私たちのためであった**ということです。  
続く4節から6節には救い主イエスさまがどうして惨めな生涯を生きられたか、その理由が解説されています。  
ここでは、  
「まことに、彼は**私たちの**病を負い、**私たちの**痛みをになった。...  
彼は、**私たちの**そむきの罪のために刺し通され、**私たちの**咎のために砕かれた。...  
主は、**私たちの**すべての咎を彼に負わせた。」(4-6)という具合に、  
キリストが受けた病、痛み、呪いはすべて「私たち」のためであったということを、  
イザヤは、何度も何度も、繰り返し繰り返し、(原文では「私たち」という言葉を九回も繰り返し返して)強調しています。

つまり、イエスさまがどうして惨めな生涯を過ごされたのか、それは私たちのためなのだと仰うのです。  
この世に来たから、この巨大な砂漠に来たから、惨めであられたのです。  
別に来なければ、惨めにならなくてもすみました。  
光り輝く栄光に包まれて、あらゆる尊厳、威光、威厳に満ち満ちて、イエスさまは天におられました。

でも、この地上に下って来られたから、すべてを失いました。

**「さげすまれ、人々からのけ者にされ」**もそうです。

誰が蔑むんですか？

この世の人でしょう？

罪深いこの世の人が「さげすみ、のけ者にし、悲しませる」のです。

そういう所に敢えて来て下さったから、イエスさまはそういう目にあわれたんですよ。

つまり、罪人の所に来て、罪人と共に生きられたから、「さげすまれ、のけ者にされ」たんですよ。

**「悲しみの人で」**というのも、悲しむ我らと共に歩まれたからです。

**「病を知っていた」**というのも、いつも病人と共におられたからです。

そして、最後は、この世で「罪人と共に数えられて、罪人と共に」葬られます。

つまり、罪人のように死んでいったのです。

否、罪のないお方が、この世で罪人として死んでいったのです。

それは、罪深い我らと共に生きられたからです。

キリストは、私たちのために惨めになりました。

4節には、そのことが書いてあります。

**4. まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。**

**だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。**

イザヤは、ここで、キリストが「私たちの」「病」と「痛み」を担ったと言います。

しかも、それは、ただの「病」と「痛み」ではない、

「罰」としての「病」、「神に打たれ、苦しめられた」結果としての「痛み」であると言います。

キリストは「病」と「痛み」を担ったが、

それは「私たちの」「病」と「痛み」であり、

そして、同時に、罪に対する「罰」としての、「神に打たれ、苦しめられた」ことであると言うのです。

それで、こう結論づけます。

**「彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。」**（5節前半）

そして、これらを次のように要約するのです。

**「彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」**（5節後半）

それでは、私たちの罪とはいったい何でしょうか。

神に打たれ、罰せられる「罪」、「そむきの罪」とは、具体的にはどのようなことを意味するのでしょうか。

イザヤは言います。

**6. 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。**

**しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。**

この「羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行く」、これが罪です。

この直訳は「人は、彼の道を行く」、要するに「我が道を行く」ということ、これがイザヤの言う罪です。

「我が道を行く」「自分の思ったとおりに生きる」、これが神さまに忌み嫌われ、罰を受け、打たれる「罪」です。

私たちが「我が道を行き」、「自分勝手に」自分中心に生きる時、それはイザヤが見ると罪以外の何ものでもありません。

しかも、このことは私たち「みな」がそうなのであって、

しかも私たち「ひとりひとり、おのおの」、人間として生まれた以上、例外なく、

神さまを中心として生きるのではなく、自分を中心にして生きている、とイザヤは厳しく告発するのです。

「一度しかない自分の人生、自分の思った通り、自分勝手に生きて何が悪い？」と思う方もおられるかも知れません。

私自身の経験を申し上げますと、

私自身は、実は洗礼を受けてからも、しばらく自分が罪人であるとは思っていませんでした。

でも、ある時、

「人間の本性は完全に堕落しきっていて、何一つ善を行うことができない」と指摘するある本を読んで目が開かれました。

何一つ、ですよ。

そこにはこうありました。

「人間の精神は完全に神の義から背き去っているので、

そこでは不敬虔な、ねじけた、醜悪な、不純な、破廉恥なこと以外、何一つ考え、願い、企てることができないほどである。

同様に、彼の心には、罪の毒が全くしみこんでいて、腐敗の悪臭のほか何一つ発散することができない。」

それを読んで、私は驚きました。

でも、そうは言っても、人間の中にも善なる心が少しはあるのではないか、

そういう淡い期待は次の言葉によって吹き飛ばされました。

「たとい、人によっては時に善の外面を示すことがあるとしても、

しかし、その精神はいつも偽善と虚偽と歪曲のもとに包まれ、

内なるよこしまによって、その魂は絡みつかれたままなのである。」

「空しい外面によって我々を欺く美德について言えば、

これは政治上の会合に於いて、また一般の人々の名声に於いて賞賛を博するであろう。

だが、天上の法廷に於いては、義の判決を受ける何らの価値も持たないのである。」

これを読んだ時、

「ああなるほど、こういう罪なら自分は罪人だ」と私は自分が罪人であることをはっきりと悟ったのです。

つまり、それは、一言で言うと神さまの前に於ける「罪」ということです。

私たちが普段罪と考えていることは「人前」に於ける罪のことです。

例えば、盗み、姦淫、人殺し、嘘つきなどは、すべて人に対してのことです。

だから、罪深いというと、刑務所に入っている人の問題であって、自分は罪深くないと思っているのではないのでしょうか。

神さまを知らない人は、人しか見えません。

だから、いつも人と比較して、自分が悪いことをしていても、自分よりもっと悪いことをしている人を見つけて安心します。

自分がスーパーで100円の物を盗んでも、1000円の物を盗んでいる人を見ては、「自分はその人よりはましだ」と安心します。

「自分よりもっと悪いことをしている人がいるではないか」と開き直ります。

そうして、死ぬまで自分の罪を認めないのです。

このように、神さまを知らない人は、自分の罪を認めることができません。

いつも人しか見ていないからです。

でも、聖書の神は、天地の造り主です。

生きとし生けるすべてのものを造られたお方です。

万物を支配しておられます。

そして、すべての悪を裁かれる審判者です。

天国と地獄の鍵を持っておられる方です。

そのお方が全部見えています。

私たちのやることなすことすべて見ておられます。

それどころか、神は私たちの心をも見ておられます。

「人はうわべを見るが、神は心を見る」とは聖書の言葉です。

神さまは、私たちの行いは勿論のこと、私たちの心をも見ておられるのです。

私の牧会している赤羽聖書教会にお婆さんの女医がおられました。

貧しい人には無料で診察してあげるという「赤ヒゲ」みたいな人で、私も無料で診てもらって随分と助かりました。

ただ、その人には困った頑固な所もあって、

私が説教で昔日本の教会が政府の圧力に負けて神社参拝した罪を悔い改めねばならないと説教すると、必ず反対するのです。

ある時は、礼拝で私が説教している最中に席を立てて出て行ったこともあって頭が痛い方でした。

それが、ある時、病気になって入院しました。

そして、私がお見舞いに行ってみると、その方は私の顔を見るなりこう言われたのです。

「先生、私は人殺しです。」

「え？何のことですか？」と聞き返すと、こう答えられました。

「私は若い時に女学校で上陸しているアメリカ兵を竹槍で突き刺す訓練をしていました。

その時、私は本気でアメリカ兵を殺すつもりだったんです。」

そして、こうも言われたのです。

「先生、私は仏式の葬式に出る度にお焼香をして偶像礼拝の罪を犯していました。」

それから、「先生、クリスチャンがこんなことをしていいんでしょうか。」と聞かれたので、私は「ダメです。」と答えました。

それを聞いて、私はこの方はもうじき召されるかも知れないとその場で思いました。

そして、それから数日後にその方は召されたのです。

みなさん、これが神さまの前に立つということです。

私たちはみな神さまの前に立つんですよ。

生きとし生けるすべての者が神さまの前に立つ日がやって来ます。

普段は、

「これは罪じゃない」とか、

「みんなやってる」とか、

「あいつと比べたら可愛いもんだ」と自己弁護していても、

いざ神さまの前に立つ日が来たら、ことごとく、洗いざらい、みんな裁かれるのです。

それまで暗闇でやってきたすべての罪がみんな明るみに出されて、明らかになるんですよ。

私たちは、人に喜ばれるようなことは、色々たくさんしてきたかも知れませんが、

でも、その、人を喜ばすような「良い」行いをした時に、私の心は何を思っていたでしょうか。

「やっぱり私はすばらしい。」と自分に栄光を帰してはいなかったでしょうか。

「良い働き」をさせてくださった、神さまに感謝しなかったのではないのでしょうか。

もし、そうだとするならば、それはこの世で最も醜いことです。

最も汚れたことです。

なぜなら、「神さまがさせてくださったこと」を自分の功績とすることは、神さまのものを盗む泥棒行為です。

本当は「善」ではないのに、あたかも「善」であるかのように見せかけることを「偽善」と言います。

「偽」の「善」です。

せっかく「善い行い」をしても、

その心は「人を見下したり、善からぬ下心があったり、不満があったり」と

汚れた思いが心に満ちているのに加えて、神さまのものを盗む罪をも加えているからです。

それだったら、良いことをしない方がまだ罪は軽いと言えます。

つまり、こういうことになります。

私たちは、表面的には「良い行い」をすることができます。

でも、それは、人の目を欺くことはできても、神さまの前には「良い」ことではないばかりか、むしろ忌み嫌われることです。

さらには、良くして下さっている神さまの恩を仇で返すことです。

神さまが恵みを与えれば与えるほど高慢になります。

「俺がすばらしい、俺がすばらしい」と自分を讃美し、

何もかもうまくいくから、「神なんかいない、俺が神だ」と、ますます傲慢になります。

全く言うことを聞かないで、恵みを受ければ受けるほど、いよいよ自分勝手に生きるようになります。

ですから、

「我が道を行く」、「自分かってな道に向かって行く」ことは、言うなれば神さまに対する背信行為です。反逆行為です。

私たちに一切の「良いもの」を与えて良くして下さっている神さまに反旗を翻すことです。

神さまを敵に回して、神と戦う、自分を神とする行為です。

私たちが、一見、人の目には「良いこと」を行っても、それは実は微妙にずれているんです。

中心がずれています。

どうズれているのでしょうか。

それは、つまり、どんなに良いことをしたとしても、

それは、結局は、神さまのためではなくて、自分のため、ということです。

自分の利益のためです。

自分の名誉のためです。

自分の栄光のためなのです。

社会福祉のために何億円も寄付しても、それは自分の名誉のためです。

アメリカシカゴのギャング、アル・カポネも福祉活動をしました。

でも、それは自分の栄誉のためです。

だから、自分の栄誉のためだから、

どんなに多額の寄付をしても、

やっていること为中心がずれているので、何をやっても総崩れです。

やればやるほど、自分の「汚れ」を撒き散らすことになります。

そして、神の怒りを買います。

神の呪いとさばきを受けることになるのです。

どんなに人目に良いことをしても、

人がやることは悉く全部自分の栄光のためだから、

どんなに恵みを与えて良くしてあげても、

ますます高慢にあたかも自分が神のように振る舞う人間に対して、神さまは怒りを燃やされるのです。

このように、みなさん、自分勝手に生きる生き方の本質は、神への反逆です。

自分を神とすることです。

そして、その代償は、神の呪いとさばきに他なりません。

宗教改革者カルヴァンはこの6節をこう解説しました。

「『おのおのはおのが道を行った』とある。

これはすなわち、

**各々が自分のペースで歩いた時、地獄へ行った、各々が滅亡に身を投げた、という意味なのだ。」**

このカルヴァンの言葉によると、

俺は勝手に生きるぜというのなら、勝手に生きればいっけけれど、

しかし、その「勝手に生きる」ということの本質が何かを知っているか、

それは「自分を神となして神に反逆する」ことであり、

その行く先には「神の呪いとさばき」、  
すなわち「地獄」が、永遠の「滅び」が口を開けて待っているのだぞ、ということになります。

高慢にも神のようにふるまって自分勝手に生きている人間たちに対して、神さまは怒りを燃やされます。  
イザヤの表現を借りて言えば、私たちの罪に対する罰を下されます。

私たちが打たれます。

苦しめられます。

刺し通されます。

粉々に砕かれます。

そして、最後は、永遠の滅びである、地獄に投げ入れられます。

このような神のさばきをまぬがれる道は一体どこにあるのでしょうか。  
神のさばきをまぬがれて救いに至る道は一体どこにあるのでしょうか。

それは、イエスキリストです。

救い主イエスキリストです。

イザヤはそれを伝えたかったのです。

彼が言う「主のしもべ」、「受難のしもべ」、イエスキリストに「救い」があります。

彼が、私たちの身代わりに神のさばきを受けて下さいました。

彼が、「まことに、私たちの病を負い、私たちの痛みをにない」ました。

彼が、私たちの身代わりに

「罰せられ、神に打たれ、苦しめられ」ました。

「彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれ」ました。

そして、「彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた」のです。

「平安」とはヘブライ語で「シャローム」と言います。

それは、神と人との、和解した、完全な平和な秩序を意味します。

つまり、喧嘩のない、仲直りをした、天国のように平和な状態です。

仲直りと言っても、

一方的に人間の方が罪を犯して神の怒りを買っていた状態が「関係良好」となるということですから、

要するに、その人間の罪が完全に清算されて、言わば落とし前がつけられて、

神さまにもう神さまにさばかれることのない状態となった、罪が赦され、むしろ神さまに愛される関係を意味します。

つまり、キリストが私たちの身代わりになって十字架で死んでくださったことで、

その「彼への懲らしめ」が私たちに罪の赦しをもたらして、神さまとの完全に平和な関係に入れられるということです。

天国に行くことができます。

最後の審判も受ける必要がありません。

キリストが私の身代わりを受けて下さったので、私たちは受ける必要がないのです。



キリストの十字架の上で私たちの罪はすべて清算されてしまいました。

だから、私たちには罪がすべて清算されてしまった後の新しい新天新地のいのちが、永遠のいのちが与えられるのです。究極の「平和」が、永遠の「安息」、「いやし」が与えられるのです。

**6. 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。**

**しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。**

イエスさまを信じる者は、イエスさまがすべての罪咎を負ってくださいます。

さばきと呪いを負ってくださいます。

さもなくば、自分で自分の罪咎を負わねばなりません。

自分で自分の罪咎を負って、十字架に磔にならねばなりません。

神のさばきを受けて、最後は地獄に行かねばなりません。

そこで「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのですか」と永遠に叫ばねばなりません。

でも、神さまは、罪深い私たちを救うために、ひとり子イエスキリストさまを私たちのところに遣わしてくださいました。

そして、私たちのすべての罪をイエスさまの上に負わせました。

「**彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、**

**彼の打ち傷によって、私たちはいやされた**」のです。

イエスさまは7節から9節に見るように、死に至るまで従順に神に従い通しました。

「痛めつけられ、苦しんでも、口を開かなかった」のです(7)。

「屠り場に引かれて」行けば、反抗せずに、その通りに、逆らわずに、従順に、従いました。

不正な裁判も耐え忍び、

死刑囚と共に十字架に磔にされたらその通りに磔にされ、

そこで殺されるままに殺されました。

7-8節はイエスさまが具体的にどういう生涯を生きられたのかが記述されていますが、

それは一言で言うならば、父なる神さまに死に至るまでも忠実に従順に従い抜いた生涯を生きたとのことです。

地上に生まれると言われれば地上に生まれ出て、

死ねと言われれば黙って死に、

しかも、罪人の死を、罪人としての死を死ねと言われれば、恥も外聞もなぐり捨てて、罪人として死なれました。

さばきを受けて、木にかけられて、神に呪われた死を、死なれました。

イエスさまは、完全に父なる神さまに従い抜いたのです。

私たちは神に逆らったのに、イエスさまは父なる神に従い抜かれました。

イエスさまは、義人でした。

父なる神さまは、

その義人であるイエスさまの上に私たちの罪を負わせて十字架で殺しました。

「主は、私たちのすべての咎を、彼に負わせた」(6)のです。

父なる神さまは、

私たちの罪と呪いをイエスさまの上に負わせて十字架で殺し、

そうして、イエスさまの「義」を私たちの上に転嫁なさいました。  
私たちからは、神に背いた罪と呪いをイエスさまの上に転嫁し、  
反対に、イエスさまからは、「父なる神さまに従い抜いた」そのイエスさまの義を、私たちの上に転嫁なされたのです。  
それで、  
イエスさまは、十字架で神に見捨てられて死なれ、  
私たちは、イエスさまの義をまとして天国に行くことができます。

10 節にはイエスさまが「罪過のいけにえ」となられるとあります。  
「罪過のいけにえ」とは、人が罪を犯した際に支払う賠償金のことです。  
律法によれば、例えば人が誰かのものを盗み取った場合には、  
その盗んだものに、さらにその五分之一を加えて、賠償しなければなりませんでした。  
人が神に対して罪を犯した場合、その賠償は本来死をもって報いらねばなりません。  
罪から来る報酬は死です。

でも、その賠償を、罪の借金を、イエスキリストは「すべて」支払ってくださいました。

みなさんが今日この時からイエスキリストを信じるならば、  
「罪過のためのいけにえ」として死なれたイエスさまがみなさんのすべての罪の賠償を支払ってくださいます。  
そして、みなさんは罪の賠償を支払うことなく、天国に行くことができます。

でも、信じないならば、みなさんがその賠償を支払わなければなりません。  
自らの死をもって、賠償を支払わなければなりません。

ここに集われたお一人お一人が、イエスさまを信じて、永遠のいのちをいただく者となられるよう心から祈ります。  
そして、神の栄光のために生きる、最高の生涯を生きていかれるよう、主の御名によって祈ります。